

ロシアが S400 型地対空ミサイル及び SU-35 型戦闘機の対中輸出を拒否
漢和防務評論 ((KDR) KANWA DEFENSE REVIEW) 20120524

KDR 平可夫、YURI BASKOV 特電：

この 3 月、ロシアのマスメディアは、中国が S400 型地対空ミサイル及び SU-35 型戦闘機を購入する可能性があるとして再度報道した。KDR は、この報道は正確ではないと見ている。ロシア軍事工業界の権威筋は、本誌に対して何度も説明した。確かに中国は、2009 年まで S400、少量の SU-35 用エンジン及びレーダーの購入の可能性を探るため非公式接触を試みていた。しかしロシアは以下の通り回答した：S400 は、現在ロシア空軍に配備しつつあり、我々はまずロシア軍の需要を満たさねばならない。また 48 機の SU-35 は、ロシア空軍が購入したばかりであり、国外の顧客は後回しになる。したがって中国に対する SU-35 用エンジン (117S シリーズ) 及び IRBIS レーダーの単体輸出は不可能である。ロシアの生産ラインは国内需要を満たすのを優先する。一定期間内は SU-35 の輸出はできないと。

以上は公式の回答である。軍事工業界の情報源は非公式に次のように述べた：中国人は、以前と同様の手口で単に SU-35 の部品だけを、特にエンジンだけを購入しようとしていると思うがどうか？部品を購入した後、J-11B と同様に SU-35 を複製するつもりだろうか？中国に対する装備品輸出の手続きは、国防部の軍事協力局及び対外情報局等を含め 13 個部門の許可が必要になったと。この話は S400 及び SU-35 が少なくとも 2011 年には中国への輸出が許可されないことを明確に示している。

中国は S400 を真剣に欲しがっている可能性がある。中国の装備する S-300PMU2 型地対空ミサイルは、射程 200KM であり、性能が向上しつつある欧米の空中発射ミサイルには対応できなくなっている。米軍の新型空対地ミサイルの射程は 320KM を超えている。しかし SU-35 については、中国の情報源は、それ程欲しいわけではないと述べた。

J-11B (ロシアの SU-27SMK のコピー)、J-11BS (ロシアの SU-27UBK のコピー)、J-15 (ロシアの SU-33 のコピー)、J-16 (ロシアの SU-30MK2 のコピー) の生産状況から見ると、おおむねスホーイ (SUKHOI) 航空機会社の辿った道を瀋陽航空機会社が同じように辿っているようだ。その理由は、瀋陽航空機会社が唯一飯のタネにしているのは純国産の J-8 II/D 型戦闘機を除き、盗作したロシア製スホーイ戦闘機であるからだ。もし知的財産権の問題を考慮しなければ、

本誌は、瀋陽航空機会社の採る路線は正しいと思う。現在 SU-34 及び SU-35 が配備されつつあるか、将来配備されようとしており、今後 30 年の世界空軍の趨勢を見ると、第 4 世代+αの戦闘機が主で、第 5 世代戦闘機（ロシア式算定法による）は少量配備となろう。F-22 及び F-35 の発注数量が逐次減少している一方 F-16V 及び F-15E の改修機数が次第に多くなっている。中国は、複製する戦闘機がなくなったとしても、それを続けるしかない。中国空軍の装備品需給の状況は、このような状況にあり、今後 20 年間、瀋陽航空機会社は継続して仕事があろう。将来を見れば、スホーイ航空機会社、瀋陽航空機会社の方針は推測することが出来る。

一、SU-34 を複製する方針がすでに決定され、風洞、磁場環境試験は終了した。今後は試作機の設計と開発がおこなわれる。しかし J-15 (SU-33) の複製に比べさらに複雑になる。なぜなら、J-15 の開発のときはウクライナから参照できる T-10K 原型機が得られたが、SU-34 は、SU-27 を基礎にしてエアロダイナミックスが 100%変更され、同じなのはエンジンだけだ。見本の機体を持たずに如何にして複製するのだろうか？したがって SU-27SK を見本にするとしても、複製にはかなりの期間を要すると思われる。KDR は、中国技術者の複製の知恵を完全に信頼しており、SU-34 の複製は可能であると考ええる。したがって SU-34 の複製機 J-11I/J-1X (SU-34 の原名は SU-27I。又は CSU-34) は誕生するであろう。

二、瀋陽航空機会社は、J-15/SU-27K/SU-33 の研究を基礎にしてロシア製戦闘機のカナード翼をマスターした。したがって中国は、SU-30MKI (インド版でカナード翼付) の複製に成功するだろう。同機は一部 J-11B の配備を入れ替わる可能性がある。空軍の認可があれば、中国国産のスラスト・ベクター・エンジンを取付け、CSU-30MKI (J-11) の機動性が多いに向上する。

三、最後は SU-35 の複製である。外見上、SU-35 は SU-27S にそっくりである。しかし実際は全く改修されており、機体部分の少なくとも 90%は異なっている。117S 型エンジンが直径 932 ミリメートルのファンを採用した結果、SU-27 の機体後部は再設計されることになった。J-11A 及び SU-27SK が採用した AL-31F エンジンのファンの直径は 908 ミリメートルである。当然ながらプラスマイナス 15 度のスラスト・ベクター・ノズルが装着される。

SU-35 の電力系統は再設計する必要がある。IRBIS レーダーのピーク値は 20KW に達する。この値はロシア戦闘機には極めて大きな飛躍である。SU-27SK

が使用する N001 レーダーのピーク値の 4 倍である。したがって SU-35 複製の鍵はエンジンにある。レーダーについて言えば、瀋陽航空機会社は、パッシブ型レーダーを跳び越え一挙にアクティブ・フェーズド・アレイ型レーダーに進化させる可能性がある。

SU-35 は、なぜ最初からアクティブ・フェーズド・アレイ型を採用しなかったのか？この質問に対し、NIIP 設計局の BELY 博士は KDR に何度も説明している。すなわち、アクティブ・フェーズド・アレイ型と比べると、パッシブ・フェーズド・アレイ型には大きな利点がある。パッシブ・フェーズド・アレイ型は、探知速度、データ更新速度及び探知目標数だけでなく、探知距離もアクティブ・フェーズド・アレイ型に劣るが、価格が大幅に安い。この価格差は大きいと。

瀋陽航空機会社の複製構想によると、高推力エンジンの WS-15 が完成し、スラスト・ベクター技術が完成したのち、2018 年前後には CSU-35 (中国版 SU-35) の複製開始が可能になるだろう。CSU-35 は、逐次現役の J-11B と交代するであろう。このようにして J-11M (CSU-35 のこと。SU-35 の設計初期は SU-27M と称した) が誕生するだろう。

以上